



学校法人  
鎌倉女子大学

## 命はめぐる

素晴らしい日本画をゆずってもらいました。

規模は、縦130cm×横320cm、画題は、菊の一生をテーマとして「めぐる」と名づけられ、色調は、白と黒のコントラストが鮮やかな作品です。

星雲の誕生を思わせるような混沌の中から命が躍動し始め、次第に花びらと茎と葉との確かな象<sup>かたど</sup>りを取り、四方八方に激しく飛び散るように絢爛豪華な大輪を咲かせ、その菊が少しずつ衰<sup>おとろ</sup>えながら黒く萎<sup>しぼ</sup>んで、やがて陰<sup>かげ</sup>りの中で命を終えていくのですが、しかしその中につつましやかな黄金色<sup>こがねいろ</sup>の種子を宿し、新しい命の誕生を暗示するという、正に「めぐる」というにふさわしい物語に構成されています。

全体の画風は、日本画伝統のやや墨絵に似た雰囲気<sup>ただよ</sup>を漂<sup>ただよ</sup>わせるものですが、しかし2枚の和紙を重ね合わせ、背景と前景を多彩な濃淡で描き分け、遠近を際立たせ、背後の海とも雲とも思わせるような波間に菊の起承転結が浮かび上がるという立体感あふれた仕上がりとなっています。

作者は、本学児童学部専任講師、日本美術院院友の大河原典子先生。「日本画の古典模写や古墳壁画の保存修復の研究によって培われた技術により、岩絵の具や箔を見事に駆使した繊細な筆使い<sup>※</sup>で、これまでも天平時代の色彩を現代に蘇<sup>よみがえ</sup>らせた吉祥天像<sup>※※</sup>を奈良の薬師寺に奉納したり、また日本橋三越や高島屋の特選会を始め全国の主要都市で精力的に個展を開催してこられました。

先生のお話によりますと、制作していく過程で幾度か色をつけたい衝動<sup>か</sup>に駆<sup>か</sup>られたとのことですが、それもなるほどよく解<sup>わ</sup>かるように思いました。ただ、敢<sup>あ</sup>えてそうはせず禁欲的に抑制<sup>き</sup>を利<sup>き</sup>かせて水墨画風に描き切ったことが、却<sup>かえ</sup>っていっそうの迫力と印象を観る者に与えてくれます。

モチーフとなった菊は、多くの花卉をもち、言うまでもなく皇室の御紋章であることから「高貴」を花言葉とし、日本の国花でもあり、伝統の尊重と進取の精神<sup>むね</sup>を旨とする鎌倉女子大学にふさわしい品格の高い作品です。

西洋画にしる、日本画にしる、つまらないものを掛けるくらいなら、白い壁のままの方がいいと、大船キャンパス開設以来何も設<sup>しつら</sup>えずにきましたが、やっと法人のお客さまにも喜んで頂ける落ち着いたきのある絵が見つかりました。

※「一花伝— 大河原典子 日本画展」(京阪百貨店)

※※吉祥天は、ヒンドゥー教を起源とし、福德を授ける女神としてインド神話の中で語られ、後に仏教の中に取り入れられ、広く人口に膾炙<sup>かいしや</sup>するに至った。四天王の一尊である毘沙門天<sup>びしゃもんてん</sup>の脇侍<sup>わきじ</sup>とされ、特に天

下泰平と五穀豊穰を願う薬師寺の吉祥天信仰は有名。所蔵の吉祥天像は、昭和26年（1951）に国宝に指定されている。なお、「きちじょうてん」とも、「きっしょうてん」とも呼ばれるが、望月信亨編『仏教大辞典』（世界聖典刊行協会）から中村元著『仏教語大辞典』（東京書籍）まで、正統的には前者が採用されている。

[>前のページへ戻る](#)